

1. 単元 遊び場めぐり
2. 研究主題との関連

身体と対話する学びをささえる授業の改善

～動きに喜びを感じ、動きの感じをもとに自らの学びが高まり、集団での学び合いが深まる授業～

(1) 単元について

2年生の子どもたちは、活動することそのものに喜びを感じ、やってみようとする。ジャングルジムを見たら上ってみたいくなるだろうし、うんていを見たらどこまでいけるのか試してみたいくなるだろう。そのため、ロケットタワー（ジャングルジム）やタイヤ、鉄棒あそびなどの遊び場という環境が子どもたちの動きに働きかけ、子どもたちのいろいろな動きを引き出すであろう。

ロケットタワーでの活動は、イラストを用いて「～をやってみよう」とはたらきかけるようにする。そのイラストの中に、ジャングルジムの中で前転や後転をする、ジャングルジムにつかまって登る、手足で立つ、足だけで立つ、うんていにぶらさがるなどの動きを示す。これらの動きから、子どもたちは自ずと平衡感覚、逆さ感覚を養うことになるだろう。このような中で子どもたちには自ずと腕で身体を支えて跳んだり回ったりする「支える・回る」運動の基礎を身につけていくという学びを構成しなければならない。

自分の動きの感じを出し合ったり共有したりすることで、子ども同士が、また子どもと指導者がつながるものと考え。そこで、子どもたちには動きの感じをふりかえるようなかわりをするようにする。動きの感じをもとに、自分の動きをふりかえったり、課題をもったりすることで自分の学びが高まっていくであろう。そして、自分の学びが深まった集団において学び合いも深まっていくだろう。

身体との対話を通した、指導者の子ども理解と子ども同士のつながりによって、その子のよりよい動きを導き出すこと、同時に動きの感じをもとに子どもたちの内面にはたらきかけ、内面から支援していくことが「身体と対話する学びをささえる」ことではないかと考えている。

(2) 単元の目標

【学ぶ態度】自分の思いや願いをもち、夢中になって活動することができる。

【思考・判断】動きを工夫する中で、身体を支える感じ、身体全体で回る感じをとらえるようにする。

【技能】それぞれの場でめざす動きを、自分の動きとして行うことができる。

(3) 授業構成の仮説

子どもの育ちを生かした活動構成

特にジャングルジムの中での前転や後転は鉄棒あそび運動の感覚の基礎となるため、いろいろな場での活動を大切にしたいと考えている。中盤ではタイヤ跳びを行う。縦に跳んだり横に跳んだりする。子どもたちの意識の中で踏切から着手までの第一空中局面、着手、着手から着地までの第二空中局面と3つの場面での感覚が自ずと引き出されるであろう。最後に鉄棒あそびを行う。鉄棒あそびではこうもり降り、逆上がり、前回り降りを中心的な活動とし、発展的な活動として、だるま回り、足掛け回りなどを取り入れていくようにする。鉄棒あそびから中学年の鉄棒（回る技中心）との連続性を考えた活動構成にしている。

身体と対話をする学びをうながす指導者のはたらきかけ

単元を通して、最初はロケットタワー（ジャングルジム）でイラストを用いて子どもたちに動きを示すようにする。ロケットタワーで養った感覚がタイヤ跳びや鉄棒あそびへとつながるようにはたらきかける。子どもに応じて、必要な感覚を意識させ課題を明確化していきたい。活動が概ね満足できる子には自分の動きをはっきりさせるために、どんな感じで動いているのかということ意識させるようにする。また、活動が満足できない子に対しては、友だちの感覚を参考にするなど感覚のよりどころとなるようなわかりやすいめあてをもつことができるようにする。また、子どもたちが自分なりに「～感じでやっている」ということをもつことができ、自分の動きとして運動を捉えるようにするために、動きの感じをふりかえるようなはたらきかけを行うようにする。そして、動きの感じをもとによりよい動きとなるように、状況に応じて全体での共有や交流の場を設けることにする。